



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	C.S.Lewis and Christian Postmodernism : Word, Image, and Beyond [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	湯浅, 恭子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11507号
Issue Date	2014-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57179
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kyoko_Yuasa_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：湯浅 恭子

論文題目名

C. S. Lewis and Christian Postmodernism: Word, Image, and Beyond

(C. S. ルイスとクリスチャン・ポストモダニズム：ワードとイメージを超える世界)

本学位申請論文では、20 世紀の英国人作家 C. S. ルイス（Clive Staples Lewis）の文学理論と作品を取り上げ、彼独自の理念と実践を照合する文学研究の手法を用いる。その結果、ルイスはクリスチャン・ポストモダニストであるとし、この新たな観点から、彼の作品はワードとイメージを超える超絶的な世界を描いているポストモダニズム作品であるとしている。

第一章では、文学批評家としてのルイスに注目する。まずキリスト教文学の視点からモダニズムとポストモダニズムの特徴を検証し、それに対する批評家としてのルイスのポストモダニズム的思想を紹介している。

モダニズム及びポストモダニズムの定義は批評家により見解が異なるが、その多くはモダニズムへの反動思想としてポストモダニズムをとらえている。批評家としてのルイスは、キリスト教とキリスト教以前の神話を分離するモダニズム化したキリスト教の見解に疑問を投げかけた。神学者のルドルフ・ブルトマンは、聖書から超自然現象を排除することで、キリスト教の脱神話化を図ろうとしたが、ルイスはブルトマンを批判し、モダニズム化したキリスト教を「水割りのキリスト教」と名付け、キリスト教の本質と区別した。ルイスは、多くの論文や随筆で反モダニズム論を展開し、20 世紀前半を席捲したモダニズムの世界観に危機感を表明する思想家であった。

キリスト教の視点からポストモダニズムをとらえる批評家には様々な意見があり、ルイスの文学史上の位置づけも安定していない。例えば、ポストモダニズムの特徴として共同体という文脈の中で柔軟に交わされる多様な見解をあげる研究者もいるが、必ずしも多くのルイス学者が、ルイスをポストモダニズムとの関連で議論しているわけではない。一方、キリスト教の視点からポストモダニズムを肯定的に解釈することによって、ルイス論を評価する研究者もいる。本申請者はこれを支持しており、複数の研究者を紹介し自らの立場を強固なものにしている。たとえば、ブルース・エドワーズは、ルイスの反モダニズム観こそ「読者が、自分の意識をテキストに映し出すことに抵抗するための解毒剤」と語る。ディヴィット・ダウニングは、フランスのポストモダニズム思想家ジャック・デリダと同様に、ルイスが時代精神に影響される不完全な人間性を考える作家だと語る。クリスタル・ダウニングは、ポストモダニズムが周辺化された価値観に個々の物語を語る場を与えた点に着目し、ルイスが同様に個人の物語を尊重するポストモダニストの作家だと肯定的に評価している。

第二章では、ルイスをクリスチャン・ポストモダニズム文学作家として位置づけ、その特徴を概観している。パトリシア・ウォーによると、英国ポストモダニズム文学はプロットの構成や時間の順番の意外性、著者の視点の限界、登場人物の行動と人格の一致、表面的な詳細と心の奥の真実の同意性などを特徴としている。本論文執筆者はルイスにも同様の傾向が見られるとし、モダニズム文学への批判を通して、古典と現代の歴史的関係性や、言語の形態（ポイエマ）と意味（ロゴス）の関連性の

希薄化に危機感を示している。そして1960年代前後及びそれ以降に書かれた英国ポストモダニズム小説のように、ルイスは読者がメタフィクション的世界での仮想体験を通して言語の意味を解釈するように書いている。

また、本章では、作家と読者の関係にも着目し、ルイスの多様な読解を可能にするポストモダニズム的創作方法にも触れている。自らの価値観というものに固執することはもう一つの牢獄に拘束されることと同じ危険性を孕んでいるとルイスが指摘したことを挙げ、ルイスは読者にだけ解釈を委ねることを避け、作者と読者の共同作業から生まれる相乗的な解釈を目指したとしている。

さらに、ルイスは自らを古い西洋のスポークスマンであると宣言していたので、キリスト教以前の神話とルイス作品との関係にも目配りがなされる。モダニズム批評は中世文学に否定的評価を下したが、ルイスは中世文学だけでなくさらに古いキリスト教以前の神話世界を積極的に評価した。ルイスの自伝『喜びの訪れ』や書簡から、ルイスは、ファンタジーのジャンル、ジェンダー・セクシュアリティの視点、読者と著者の両者の関係性など、周辺化された視点を復興し、神話の再話、キリスト教的読みかえ等の手法によるメタフィクションを通して、リアリズム的理解からの超越を試みた。ルイスの反モダニズム観とポストモダニズム的文学スタイルは、聖書だけでなく、古い文学（ケルト、ゲルマン、ギリシャ・ローマ、北方神話、中世・ルネサンス文学等）の影響を受けたものとして結んでいる。

第三章から第五章は、ルイスの主要作品を個別に精査し、クリスチャン・ポストモダニズム作品として検証している。

第三章では、小説『いまわしき砦の戦い』(1945)を扱う。本作品は魔法使いマーリンが眠る「閉じられた庭」の破壊と再創造の物語として検証し、現代社会の物質主義を疑問視する作者ルイスが、ポストモダニズム的文学手法を利用し、作者と読者の共同作業を文学に取り戻そうとした作品であるとする。また、本章はドリス T. マイヤーズの論を継承し、善悪の戦いを強調する多くの評論とは異なり、本作品の焦点がブラクトン大学のマーリンの森にあるとする。マーリンが覚醒した後の庭の破壊と再創造の予感に着目し、ルイスが現代の読者に語ることを意識した作家であることを示している。

第四章では、現代社会が忘れた記憶の回復をポストモダニズム的文学手法で描いた作品『朝開き丸東の海へ』(1952)を分析している。本作品は、地理的な方角の＜東＞を中心に読まれることが多いが、しかし複数の主人公たちの各航路が東西に限定されているわけではなく、それぞれに異なる「航海図」の途上の物語である。イムラムとはアイルランド語で「船出」を意味し、中世アイルランドの文学ジャンルであり、航海冒険物語を指す。本作品は、東に向かう中世の航海文学と西に向かうイムラムが統合した航海文学であることがわかる。

第五章では、ルイス最後の小説『顔をもつまで』(1956)における神話の書き直しや読み直しといったポストモダニズム的手法を分析している。作中、女主人公オリュアルが、手紙を書き直し、読み直していく過程で、新たな世界が創造される。本作品はアプレイスの『黄金のろば』の再話として書かれたが、従来の神話（ギリシャ・ローマ）では、妹プシュケの犠牲に話の焦点があてられている。しかし、北欧神話の再話として読むと、他者とのかわり（共同体）が手紙の著者オリュアルの自己解釈を揺るがしていく。オリュアルは、手紙を書き、読む過程を通して、死んで蘇る神々の物語である神話の世界を体験的に知る。手紙の書き手であるにも関わらず、手紙を再び書くこと、何度も、声をだして読む、黙読を通して読むことを通して、著者オリュアルの当初の思いとは異なる、それらをは

るかに超えたビジョンが展開され、オリュアルが新しいアイデンティティへ向かう変身を予感させるポストモダニズム的な作品として読むことができる。

以上、本申請論文は、ポストモダニズムの視点からキリスト教を検討した思想家ルイスに、クリスチャン・ポストモダニズム作家としての新たな地位を付与している。従来の児童文学作家としてではなく、20 世紀英文学の潮流の中でルイスの思想と作品を再評価・再配置している。